

学 年 通 信 号外

平成22年3月16日

明秀学園日立高等学校 第1学年



明秀日立生(白梅)の諸君。「明るく・清く・凛々しく」の建学の精神に照らし合わせ、それに適うよう日々を過ごしていますか。先日の予餞会において、少々考えることがあったので、吐露しておきたいと思ひ立ち、号外を発行します。

この号の内容は、あくまでも私個人の見解です。どっかの文献から引いてきた部分もない(似たようなことを言っている人はいると思うが)し、一夜で書き上げる事からしても論の綻びや脆さがいたるところにあるだろうことを断っておきます。

諸君の議論の種になれば幸いです。

ー共有するということー

何か大きな競技会の前になると出場する競技者(アスリート)に向かってインタビューが行われる。「今大会にかける意気込みを」などと訊ねられると、{以前のように頻繁には聞かなくなった(そういう報道番組を私自身が見なくなった事が大きな要因であろう)もの、聞けばやはり、}内心穏やかならざる答えが返ってくることもある。

「見ている人に感動を与えるようなプレーをしたい…」

大きなお世話とはこのことである。こんな事言う人のプレーなんか頼まれたって見たくない。こんな事言う人が人を感動させることなんて到底できっこない。だいたい感動の何たるかを知らないから、こんな事が言えるのだ。見る人から見れば、出し物が思うようにいかず、ステージで肩を寄せ合って恥ずかしさに堪えている姿にも感動を感じるものだ。見る人から見れば彼等の背景が見えてしまう。前を向くこともできず、声も観客に届かない。もう少しみんなで練習をしておけば良かったと悔い入る者や、今すぐこの場を立ち去りたい気持ちに支配されそうになっている者もいたことだろう。それでも誰ひとり逃げることなく堪えている。真摯に自分と向き合っ、素直に恥ずかしいと感じ、それをこらえている。私にとっては「見ている人に感動を与えるようなプレーをしたい」と言っておきながら、中途半端なところで特に印象に残るような試合内容も残さず敗退してしまう人よりも、肩を寄せ合い恥ずかしさに堪えながら声なき声で歌う彼等の姿にこそ感動を感じる。彼等と悔いる気持ちや恥ずかしさや口惜(くや)しさを共有することができる。

いいですか。皆さんも注意して下さいね。「人に感動を与えよう」なんて、そんなおこがましいこと口が裂けても言っちゃダメですよ。「僕には、私には万人に通じる背景がある」と言っているようなものです。私はみなさんのことを知っていますからみなさんの背景が見えますけど、「人に感動を与えよう」なんて言う人のことは知りませんから、努力はしてきたのだからの憶測はできますが背景は見えません。

よく、引退試合とかラストランとかそんなシチュエーションの客席に大粒の涙を流している選手の奥さんが映し出されます。奥さんはとても感動している。我々は残念ながらそこまで感情移入できない。彼女がなぜそこまで感動に打ち震えているのかと言えば、それは、旦那さんであるその選手の背景を、つまりこれまでの苦勞を、努力の跡を誰よりも良く知っているからです。

だから、自分の背景を知るよしもない赤の他人に「感動を与える」ことができると思っている人は、感動のなんたるかを知らない底が浅い人間だと暴露しているようなものなのです。そもそも軽々しく「感動」を口にすることからして安物っぽい。

ー失敗は成功の元ー

それにしてもみなさんは良い経験をしました。人は(人に限りませんが)失敗から学ぶと言うでしょう。次

はどうしようとか、こうしてやろうとか、失敗を糧にして成長していける。

老婆心ながら、失敗に纏(まつ)わる事でやってはいけないことを二つ知っているのを披露しておきます。

まず、失敗を他人のせいにはしないこと。他人のせいにするのは簡単ですが、そんなことをしたら、せっかくの失敗が糧になりません。口惜しい思いや情けない思いは共有しなければ、何のために失敗があるのか、もったいなくてしょうがない。もちろん成功感や達成感を共有する喜びは何物にも代え難い。しかし、そこに到達するまでに様々な失敗や障害を逃げ出さずに乗り越えなければなりませんから、みんなで成功感や達成感を共有するためには大変な努力を要することになる。だから達成したあとの喜びは尋常ではない。我々が事の成功や達成を目標に掲げるのはそのためです。ただし、そこへ到達するためには、そこへ到達するためのガイドウェイがイメージされていることと同時に到達時のイメージも共有されていることが重要になります。到達時のイメージとは、例えばそれが今回のような出し物であったなら、見ている人がどんな反応を引き起こすかとか、やり終えた後の自分たちの様子がどのようであるかが見えているということです。

さて二つめは、失敗するのがいやで逃げ出すこと。努力している内に、どうもうまくいきそうにないとか、面倒くさいとか、仲違(なかつが)いしてしまっで逃げ出す。これは言語道断、話にならない。そんなことをしたら何も築けない。失敗という糧にありつけません。

この二つのタブーに陥りがちな人の傾向として、「自己鍛錬なき自己主張」があるように思います。何も努力しないのに自己主張だけは人一倍ということ。うとうしいばかりで、せっかく他の者が地道に積み上げていった努力の形をいとも簡単に切り崩し、後にお寒い風を吹かせてしまう。

ー振り返り、次に生かすこと… ばなしはなしって話ですー

正直なところ、先日の予餞会は段取りも悪く、いろんな所であらが目立ちました。でも人のせいにはいきません。裏方で働いていた委員会メンバーの口惜しさや情けなさを我々は共有し、彼等と共に手を携え、来年に雪辱を期さなければなりません。

練習の成果を遺憾なく発揮できたところもあれば、緊張や恥ずかしさで思うようなパフォーマンスができなかったところもあったように見受けました。しかしその出し物すべてに背景が見え、私は大きな拍手を送りました。みなさんは正当なる(努力に基づいた)自己主張を遂行したと思います。とは言え、みなさん一人ひとりの内には思うとおりにいかず、口惜しかったこと、情けなかったことなど様々な気持ちを抱えていたのではないのでしょうか。そうしたみなさんの昨日はもう過ぎ去ってしまいましたが、そのような様々な気持ちを糧にして次回においてどう雪辱するかを検討しておかなければなりません。

つまり、やりっぱなしはなしだということです。やりっぱなしにしてしまうと自己鍛錬なき自己主張をする者達と同じになってしまう。せっかく努力したのにもったいないでしょ。

ー結局勉強の話に落ち着いてしまうー

我々には、努力すればその努力を無駄にしたくないという意識が必ず働きます。やったことを振り返ろうという意識は、前もって努力したからこそ生じる意識です。努力の量に比して振り返らずにはおれなくなりません。なぜあそこであんなにうけたのか、あそこはなぜうけなかったのか。ここはこうしておけばよかったとか、ここは思うつぼだったとか。同じ汗をかいた仲間がいればなおさらのこと振り返らずにはいられません。これは「予習ー授業ー復習」のサイクルに酷似しています。本番(授業)に備え、前もって努力(予習)し、本番(授業)に臨み、次に生かすために振り返り(復習)を行う。しっかりと前もって努力をしたからこそ、その努力を無駄にしないように授業では集中でき、授業での収穫を無駄にしないため、授業の復習に勤しむ。予習で誤りや解らなかつたこと(失敗)があれば、それは反って身に付きやすく(糧)なる。やはり、やらされてやる部分はどこにもない**自発的動機**のなせる業です。ついでに言っておけば、自己鍛錬なき自己主張をする者達は、予習もせず、授業中に自己主張(喋る・ふざける・寝る etc)に終始し、授業を振り返る意識など微塵も生じないということになります。これは、外発的動機でしか動けない人のなせる業ということになります。

みなさんの予餞会を観ながらこんなことを考えていました。

次回の学年通信は「何のために学ぶのか」について提言します。